

学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 夏 天 君

論文題名 親の長期不在と子どものライフコースの格差に関する研究——中国における「留守児童」経験者の分析から——

審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員	社会学修士	稲葉昭英
副査	慶應義塾大学法学部教授・社会学研究科委員	社会学修士	竹ノ下弘久
副査	松山大学人文学部准教授	社会学博士	吉武理大

I 本論文の構成

本研究は、親の不在が子どもの教育達成に対して有する不利な効果とそのメカニズムを明らかにするために中国の「留守児童」世帯（父母のいずれか／双方が就労のために別居している世帯）に着目し、「留守児童」経験が子どもの教育達成に及ぼす不利な効果、およびその不利が形成されるメカニズムを大規模データの計量分析によって検討したものである。

近年の家族社会学、教育社会学、社会階層研究では子ども期の定位家族のあり方がその後のライフコースに大きな影響を与えることが明らかにされており、そのメカニズムの解明が待たれているが、本研究もそうした研究の一つとして位置づけられる。その意味で本研究はいわゆる中国社会研究ではなく、中国のデータを基にして広く家族と子どものライフコースの関連を明らかにしようとした研究である。

本研究の構成は以下のようなものである。

【目次】

第1章 問題の所在

- 1.1 はじめに
- 1.2 定位家族経験と子どもの不平等
 - 1.2.1 親不在世帯と子どもの不平等
 - 1.2.2 「留守児童」世帯の分析視角

1.3 「留守児童」について

1.3.1 「留守児童」の出現背景

1.3.2 「留守児童」の現状

1.4 研究課題

1.5 使用するデータについて

1.6 本研究の構成

第2章 理論的枠組み

2.1 社会階層とペアレンティング

2.2 親の不在とペアレンティング

2.3 ジェンダーによるペアレンティングと教育達成の格差

2.4 小括

第3章 親の不在状況からみるペアレンティングの変化

3.1 序論

3.1.1 問題の所在

3.1.2 分析課題

3.2 分析対象と主要の変数

3.3 分析手法

3.4 分析結果

3.4.1 記述的分析の結果

3.4.2 固定効果モデルによる推定

3.5 小括

第4章 親の不在状況と子どもの大学進学希望の男女比較

4.1 序論

4.1.1 親の不在と子どもの大学進学希望

4.1.2 分析課題

4.2 分析対象と主要の変数

4.3 記述的分析の結果

4.4 多変量解析の結果

4.4.1 親の不在状況と主養育者の子どもへの教育的なかかわり

4.4.2 親の不在状況と大学進学希望

4.4.3 KHB 法による媒介効果の検証

4.5 小括

第5章 親の不在経験と普通科高校進学

5.1 序論

5.1.1 「留守児童」経験と高校進学格差

5.1.2 「留守児童」経験の規定要因

5.1.3 分析課題

- 5.2 分析対象と主要の変数
- 5.3 分析手法
- 5.4 傾向スコア・マッチング分析の結果
- 5.5 小括

第6章 親の不在経験と分岐する運命

- 6.1 序論
- 6.2 知見の整理
- 6.3 学術的・社会的インプリケーション
 - 6.3.1 「留守児童」経験と「分岐する運命」
 - 6.3.2 子どもの不平等と親の不在・ジェンダー
 - 6.3.3 親不在の教育格差の是正には何が必要なのか
- 6.4 本研究の限界と今後の課題

付 記

文 献

第1章および第2章では基礎概念の定義を行ったうえで先行研究のレビューおよびそれにもとづく分析枠組み、研究課題（RQ）の設定が行われる。第3章では親の不在による子どもへのかかわりの減少、第4章では親の不在と子どもの大学進学希望の関連およびペアレンティング仮説によるその媒介効果の検証、第5章では親不在の経験が普通科高校進学に対して有する因果効果の検証が行われる。第6章では計量分析の結果を理論的に整理し、政策的な提言などが行われる。

II 本論文の概要

本研究は中国における留守児童世帯出身者と非留守児童世帯出身者のライフコース上の格差に関する計量的研究である。日本、英語圏の家族社会学・教育社会学・社会階層研究からは、ひとり親世帯出身者が教育達成や職業的地位達成において大きな不利を経験していること、そうした格差が必ずしも縮小していないことが明らかにされている。人口学者 Sara McLanahan は社会階層によって異なるこうした家族経験の差異およびそこから生じる子どものライフコースが二極化する現象を *Diverging Destinies*（分岐する運命）と呼んだ。McLanahan 以降、後続の多くの研究が世界各国で行われ、多くの研究者がそうした格差の存在を確認すると同時に格差の形成メカニズムを明らかにしようとしている。従来の研究は経済的剝奪がそうしたメカニズムの一つであることを明らかにしているが、それだけではこうした格差は必ずしも説明し得ないことも明らかにされている。

そうした中で画期となった研究が、社会学者 Annette Lareau による質的研究である。Lareau は社会階層による親の子どもへの関わり（ペアレンティング）の差異に注目し、

高学歴者が多いホワイトカラー層では子どもに望ましい社会的スキルの獲得を目標とした意図的育成という養育方法がとられるのに対して、非高学歴者が多いブルーカラー層や貧困層では子どもの自由に任せる自然的放任という養育が行われることを指摘し、これがライフコース上の学歴達成などと結びつくことを論じ、多くの後続の研究を生み出した。

本研究では親の不在が子どものライフコース上の不利を引き起こすメカニズムを明らかにするために、中国の「留守児童」世帯に注目し、大学進学意欲、普通科高校への進学といった教育達成に関連する指標を設定し、留守児童・非留守児童間の格差の実態とペアレンティングの差異による媒介効果の検証を行っている。中国における留守児童はきわめて多く、2020年時点で0-17歳の子のうち留守児童世帯の子は約6700万人、人口の22.5%に達するとされる。

本研究が使用するデータは北京大学社会科学調査センターによるパネル調査「China Family Panel Studies」(CFPS)の、第1回～第6回(2010年～2020年)調査の個票データである。第1回調査である2010年調査の有効サンプル数は42,590(0～15歳人口に該当する子ども票が8,900)であり、2020年の追跡調査の有効サンプル数は28,529(子ども票が6,985)と大きい。なお、本研究では離死別によるひとり親世帯は分析対象に含めず、以下でいう「親不在」世帯とは就労を理由として親が別居している(外出労働と呼ばれる)世帯を指す。

第3章「親の不在状況からみるペアレンティングの変化」では、2012年から2020年までのパネルデータを用いて、親の不在によるペアレンティングの頻度の変化が検討された。固定効果モデルを用いた分析の結果、「母不在」「両親不在」、とくに両親不在の世帯では、主養育者による子どもへの情緒的なかわり・実践的なかわり・モニタリングの頻度が減少することが明らかにされた。また、こうしたペアレンティングの減少の一部は、主養育者の続柄の変化、とりわけ母親から祖父母への変化によって説明された。さらに、子どもの性別による差異について分析したところ、男子に親の不在によるペアレンティングの減少が顕著である傾向が示された。

第4章「親の不在状況と子どもの大学進学希望の関連についての男女間比較」では、2010年データを用いて、親の不在と子どもの大学進学希望(教育アスピレーション)との関連およびペアレンティング仮説によるその媒介効果が検討された。分析の結果、男子においてのみ「両親不在」世帯で大学進学希望が低いこと、祖父母による養育は両親による養育と等価なものとはなりえないことが明らかにされた。しかしながら、ペアレンティングの媒介効果は限定的であり、「両親不在」の効果の約1割が説明されるに過ぎなかった。ペアレンティングには、子どもへの教育的かわり以外に、交友関係の把握・統制などのモニタリング的な側面も含まれるが、データの制約ゆえにこれらが変数化できておらず、その結果十分な説明力が得られなかった可能性は否定できない。

「留守児童」経験には階層的な異質性が交絡しており、出身地域や親の学歴などの統

制変数に還元できない「観察されない異質性」が存在する。したがって、「留守児童」経験の効果を検証するためにはこうしたセクション効果を統制する必要がある。そこで第5章「親の不在経験と普通科高校進学」では、傾向スコア・マッチング法 (Propensity Score Matching) を用いて普通科高校進学に対する「留守児童」経験の効果の分析がなされた。この分析では2010年 (wave 1)、2012年 (wave 2)、2018年 (wave 5) のデータが使用された。従属変数に普通科高校進学を設定した理由は、大学進学などの結果がまだデータとして公開されていないこと、中国において普通科高校進学がライフコースの初期段階における重要なライフチャンスの一つであるためである。分析の結果、子ども期の「留守児童」経験が普通科高校進学に与える負の効果が確認された。普通科高校進学は大学進学との連動性が大きく、このために子ども期の「留守児童」経験はライフコースにわたって長期的な不利を生み出す可能性があることが示唆された。

第6章は全体の結論である。本研究全体を通じて、中国における子どもの「分岐する運命」は「留守児童」と「非留守児童」の間に顕著な形で生じていること、そうした格差の一部はペアレンティングの不足から説明された。世帯の所得の上昇を意図した外出労働が、意図せざる結果として教育達成をはじめとする不利を生み出していた。こうした点では、家族環境による格差を平等化するような学校教育のあり方が望まれることになる。

また、従来の親の不在と子どものライフコースの格差に関する研究は、子どもの性別による差異を十分に検討してこなかったが、本研究は、不利は男子により大きいこと、そうした不利はペアレンティングの不足が男子で顕著になることで生じていることを明らかにした。女子にはこうした不利はあまり観察されないが、このことは女子が向学校的な規範を内面化しており、このために家族状況による影響が小さくなるものと解釈された。

III 評価

11月30日土曜に慶應義塾大学三田キャンパスにおいて博論の公開審査会が開かれ、本研究に対する質疑と著者による応答が行われた。以下はその内容をもとにした評価である。

本研究は近年多くの研究者の注目を集めている、家族社会学・教育社会学・社会階層研究の交差領域にある「定位家族経験とライフコース」に関する研究の一つであり、親の子どもへの関わりの格差に注目するという新しい視点からこれらの領域に切り込んだ意欲的な研究である。

本研究が評価されるべき点は、第1に英語圏・日本語圏の先行研究の徹底的かつ詳細なレビューである。このレビューによって既存の諸研究が手際よく整理され、定位家族と子どもの教育達成に関する格差およびその形成メカニズムに関する研究の現状と課題が明示され、本研究の研究課題が説得的に示されている。第2に良質な中国の大規模データを用いて留守児童世帯・非留守児童世帯にみられる格差およびその形成メカニズ

ムを明らかにしたことである。留守児童世帯の子どもの問題は中国でも指摘されているが、本研究はそうした子どもに不利が見られることをデータによって示した。本研究の知見は中国社会研究にとって大きな意味を有するが、それ以上に広く家族社会学・教育社会学・社会階層研究にとって貴重な情報を提供しており、従来の研究を発展させた貢献度の大きな研究といえる。第3に固定効果モデル、ランダム効果モデル、傾向スコア分析、KHB法による媒介効果分析といった最先端の高度な統計的手法を用いて理論的な仮説とその検証を行っていること。著者はこれらの統計学的方法についての深い数学的理解のもとに適切にこれらを使い分け、また二重、三重のロバストネスチェックを行っている堅実な点も大いに評価できる。

本研究が明らかにした知見は多岐にわたるが、とくに家庭での教育が子どもの成績や学歴達成に大きな影響力をもつ日本や中国では親不在の負の効果が子どもに生じやすく、その影響が男子に大きくなることを明らかにした意味は大きいだろう。東アジア諸国では一般に社会階層をこえて子どもの教育に熱心な家庭が多く、階層による子どもへの関わり方の差異以上に、親の不在のような家族環境要因による差異のほうが大きくなるという指摘も比較社会的には重要な意味を持つものといえる。

一方で、課題としては以下のような点が指摘された。

第一に、計量分析の知見をもっと大きな理論と結びつけることが可能だったのではないか、という点。著者はきわめて禁欲的に自らが明らかにした知見を既存の先行研究と関連付けて整理しているが、子どもにとって親とはどのような意味を持つのか、家庭での教育的関わりは学校教育と比較した場合にどのような意味を持つのか、といった大きな理論的抽象化が可能だったのではないかという指摘である。

第二に、中国の教育制度などについて解説する章が設けられていないという構成上の問題点。これらの解説は各章中でなされているが、日本人研究者にとっては必ずしも中国の教育制度は自明ではないため、章として独立させてまとめたほうが理解しやすかったのではないか、という指摘である。

第三に、ペアレンティングの概念についてもっと詳細に理論的な検討を行うこともできたのではないか、という点。先行研究に大きく準拠した形でペアレンティングの概念が使われているが、ペアレンティングを社会関係資本とみなすか、文化資本とみなすか、といった理論的な整理がなされれば、研究の意義がより一層高まったのではないか、という指摘である。

IV 審査結果

このようにいくつかの課題は残されているものの、論文の水準はレビューおよび理論的な整理、堅実かつ高度な計量分析、最終的な結論いずれについてもきわめて高いものと評価できる。また、家族社会学、教育社会学、社会階層論など複数の研究領域にも貢献しうる内容となっていることは今後の研究の大きな展開を期待させるものである。先端の統計的手法についての深い理解に基づいた高水準の計量分析を行ったという点で、

著者の力量の非凡さは高く評価されるべきであると思われる。

審査委員一同は本論文を博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。

以上。